

# 薬理学 I

責任者 : 中山 貢一 教授  
担当講座 (科) : 分子細胞薬理学講座

講 義 22.5 時間  
単 位 2 単位

学 年

2 学年 前期

## 学習方針

### 基本理念 :

疾病の治療において、薬物療法は重要な位置を占めている。“なぜ薬がさまざまな疾患の治療に用いられるのか”これを理解するため、薬の生体への作用、及び生体の薬への作用、すなわち薬と生体の相互作用を明らかにする薬理学を修得することが必須である。「薬理学 I」では、薬物のターゲットとなる生体の器官や組織の形態・機能に関する基礎知識を習得するとともに、代表的な薬物の薬理作用を学ぶ。さらに、重要な疾患についての知識も習得し、薬物の臨床への応用を考える。これによって、「薬理学 II、III」への学習基盤を整え、薬物療法の基礎を確立する。

### 一般目標 (GIO) :

薬物が作用する生体の“しくみ (形態)”と“はたらき (生理機能)”を十分に理解し、代表的な薬物の作用 (薬理作用) と臨床応用を習得する。

### 到達目標 (SBOs) :

1. 中枢神経系の形態・機能、並びに主要な疾患、また代表的な薬物を列挙し、その薬理作用を説明できる。
2. 末梢神経系の自律神経系と体性神経系の形態・機能を列挙し、代表的な作用薬と薬理作用を説明できる。
3. 心臓と血管系の形態と働き、並びに主要な疾患を列挙し、代表的な治療薬の薬理作用を説明できる。
4. 呼吸系を構成している喉頭、気管、気管支、肺、並びに呼吸筋の構造と呼吸運動の生理を理解し、主な疾患と治療薬を明示できる。またその薬理作用を説明できる。
5. 消化器系の形態と消化・吸収・代謝機構を理解し、主要な疾患とその治療薬、及び薬理作用を説明できる。
6. 泌尿器系のしくみと尿生成機構を理解し、それらへ作用する代表的な薬物を明示できる。さらにその薬理作用を説明できる。
7. 生殖器官を含む内分泌器官の形態とホルモンの合成・分泌、及び作用を理解し、内分泌系に作用する薬物、並びに補充療法について説明できる。

## 講義日程

月日	曜	時限	講座(科)名	担当者	内 容
4/28	火	3	分子細胞薬理学講座	立川 英一 非常勤講師	薬理学 I 概要：ガイドランス、薬物の標的としての生体の形態・機能
〃	〃	4	〃	〃	中枢神経系のしくみと働き：大脳・小脳/薬物作用
5/ 1	金	3	〃	〃	中枢神経系のしくみと働き：脳幹・脊髄/薬物作用
〃	〃	4	〃	〃	自律神経系のしくみと働き：交感神経系/薬物作用
5/11	月	3	〃	〃	自律神経系のしくみと働き：副交感神経系/薬物作用
〃	〃	4	〃	〃	運動神経系と骨格筋のしくみと働き/薬物作用
5/25	〃	3	〃	〃	知覚神経系と感覚器系のしくみと働き/薬物作用
〃	〃	4	〃	〃	循環器系のしくみと働き：心臓/薬物作用
5/29	金	3	〃	〃	循環器系のしくみと働き：血管系/薬物作用
〃	〃	4	〃	〃	呼吸器系のしくみと働き/薬物作用
6/ 9	火	〃	〃	〃	内分泌系のしくみと働き/薬物作用
6/26	金	3	〃	〃	泌尿器系のしくみと働き/薬物作用
〃	〃	4	〃	〃	生殖器系のしくみと働き/薬物作用
7/10	〃	3	〃	〃	消化器系のしくみや働き/薬物作用
〃	〃	4	〃	〃	薬理学 I のまとめと演習

## 教科書(教)・参考図書(参)・推奨図書(推)

	書 名	著者名	発行所	発行年
教	人体機能生理学	杉 晴夫 他	南江堂 (定価 10,000 円)	2003
参	薬理学マニュアル	高柳 一成 他	南山堂 (定価 4,800 円)	2002
推	標準生理学	本郷 利憲 他	医学書院 (定価 12,000 円)	2005

### 成績評価方法

出席、レポート、定期試験、小テストなどから総合的に評価する。

### オフィスアワー一覧

授業を担当する専任教員氏名	方 式	曜	時間帯	備 考
分子細胞薬理学講座 中山 貢一	B - ii			